

〔解題〕

「寄せ場学会通信」は、1992年4月の第6回総会までに17冊が発行された（号外1冊を含む）。第1号が「日本寄せ場学会・設立大会」の余韻さめやらぬ1987年7月に出されているので年に3冊強、おおよそ「季刊」といいいいペースで会員・会友の手に届けられてきたことになる。年報ではフォローしきれない夏祭り・越冬、あるいは暴動などといった寄せ場の日々の運動と学会とを切り結んでゆく、困難な役割を課せられているといえる。それがこの5年間でどれだけ果たされてきただろうか？その解答は従来の寄せ場観が社会的・経済的変動によって、構造的に変わりつつ変わらされつつある、まさにこれからの問題としてあるだろう。それら変容に敏感に、また「通信」が寄せ場の、寄せ場学会の、日常生活のなかで不可欠なものとなるような方向へ、散弾となって發送されつづけねばならないのである。そのときこそ、寄せ場「学会」としてのあり方を最も直截に映し出すものとなるはずである。

「通信」発刊にいたる経緯をしめした文章は「通信」第1号にも年報にも見当たらない。寄せ場学会の24時間の活動を伝える「学会日録 1986.6~1988.3」（年報No.1）には、87年7月の項に「『寄せ場学会通信』No.1発行」とあるだけで、おそらくその前月、6月6・7日におこなわれた運営委員会で話し合われたのだろうが、それ以上のことは今はわからない。半ば帰納的に類推すれば、「今後会員相互、事務局と会員間、などのコミュニケーションにより資するように努めたい」（「通信」No.4・1987年度活動報告）、「担当者交代で回数も多くなり、内容も年報を先取りするような理論的提起を載せたりなど、大きな進展があった。他方、遠隔地間の会員相互のコミュニケーションをはかり、編集体制を充実するといった面は、足りなかったように思う。」（「通信」No.8・1988年度活動報告）ということになるだろう。この毎年度初めの「活動報告」が掲載されることによって「通信」それ自身が、この5年の間にどう機能してきたかを物語っている。「通信」はもっともっと利

用されていいようだ。利用されてこそ通信の役割や価値も伴われてくるのである。

2月15日の運営委員会で確認されたように（「通信」No.16参照）、第6回総会以後は西日本支部から東日本支部へ編集が戻ることとなった。西日本支部ではそれを記念(?)して、今では入手困難となっていた（かな?）バックナンバーを全点復刻、合冊することにした。通読してみても、号によっては精粗のバラツキが感じられるものの年報の隙間を埋めるに相応しい問題が素のまま提出されていたり、過去の活動（総会、学習会、シンポジウムなどが詳しく報告されている）や学会としての寄せ場での運動が鮮明に浮かびあがっていることに気がつく。常に充実が課題となっていた「通信」も、東日本支部・西日本支部間で何度か編集担当が「代替わり」したにもかかわらず、その基本線は押さえられてきたのであり、その意味で寄せ場同様、生きているのである。さらに趣味的に、それら編集担当が変わることによって「通信」がどう変わっていったかを読み比べてみたり、No.5からNo.9までは定価（一〇〇円）がついていたことなども今更ながら発見できて面白い。新規に入会された方や欠号がある方は、ぜひこの機会にすべて揃えてもらいたい（もちろん今までの分とは別に保存用が……という方も大歓迎）。とにかく矯つ眇めつ読んで欲しい。寄せ場学会の5年間とこれからがここにある。

最後に、これまで「通信」の執筆・編集・作成・発送作業にたずさわってきたすべての方々に、ここからの謝意を。また、これからそれらの作業にのめり込んでゆく方々には、待ち受けている大きな課題のまえに、過大なる期待を!!

1992年4月4日

西日本支部事務局